

インド・世界詩歌協会との共同シンポジウムより

メッセージ

池田大作

一九六二年に東洋哲学研究所が創立されて四十五周年、また、一九九二年に東洋哲学研究所インド・センターが開設されて満十五年の佳節を刻む本年、世界詩歌協会と東洋哲学研究所との共催によるシンポジウムが、かくも盛大に開催されましたことを心からお祝い申し上げます。

あまりにもお懐かしいスリニバス会長、パドマナーバン副会長、クマナン議長をはじめ、ご多忙のなか、ご列席いただきました諸先生方に心より御礼申し上げます。

一九九五年には、「世界詩歌協会」の皆さまから、光栄にも、初の「世界桂冠詩人」賞を授与していただきましたことは、詩人の一人として、私の最大の誇りとするところであります。

この度、貴協会の諸先生方と私ども研究所の研究員が「世界平和と調和と人間主義の詩」とのテーマのもと、世界平和、万物の調和・共生、人間主義という重要な観点から詩歌論を展開されることに、大きな期待を寄せております。

現代物質文明の長足の進歩による情報通信技術や交

通手段の飛躍的發展に伴い、人類はかつてない利便性や豊かさを手に入れました。インターネットや電子メールを通して、瞬時に世界中の情報や物を入手することも、かつては考えられない速度で地球上のあらゆる場所と通信することも可能となりました。

しかし、このような膨大な情報と物の洪水の中で、現代物質文明を生きる人びとの精神は、果たして豊かになっているのでしょうか。花や鳥の囀り、夜空の星々と語り合い、詩を詠むという豊饒なる心を消失してはいないでしょうか。いな、現代人の心は、広大な宇宙や大自然の律動、悠久の時の流れから切り離され、孤独感と疎外感にさいなまれてるように映るのではありません。

人間と宇宙、人間と自然、人間と社会が分断され、人間と人間同士の結びつきさえ、限りなく希薄になりつつあるようにも思えるのであります。

今日の科学技術の發展をもたらしてきた思考法は、一次元からいえば、外なる現象を自己から切り離し、対象化していきます。ここに、あらゆる現象の「物」

化が起きる危険性がはらまれております。

すべてを自己と距離を置いて分析し、「物」や「数」という要素に還元していく思考法によって、確かに現代物質文明は長足の進歩を遂げてまいりました。

しかし、その一方で、ともすれば人間やかけがえない生命までも「物」化し、統計上の「数」として捉える傾向性は、大宇宙や大自然と共鳴し、感動しゆく「詩心」を衰弱させ、そこから沸き出る豊かな精神性、倫理性をも奪うに至っているのではないのでしょうか。

こうして、大自然や宇宙が奏でる根源的なリズム、「永遠なるもの」から切り離されたことは、現代人の孤独感、疎外感を生み出してしまうのであります。

物質的な豊かさや尽きることのない欲望の充足のみを追いつめていけば、「自分さえよければよし」とするエゴイズムが蔓延していきます。その結果、他者に対する無関心、他者に関わろうとする意識の無氣力化が進みます。非寛容や差別意識、憎悪などは、生態系の破壊、紛争、テロなどの直接的、構造的な暴力をも引き起こす元凶となりがねません。

現代社会においては、万物の共生、調和の律動が幾重にも分断され、エゴイズムに毒され、矮小化した「自我」による抗争によって、家庭から民族、国家、人類社会の平和が蹂躪されているのであります。

私がスリニバス会長と初めてお目にかかったのは、一九七九年七月のことになりますが、この時、会長は、次のように述べておられました。

「真実の詩人は、宇宙、精神、真理などについて語る詩人です」「詩には常に呼びかけるもの（メッセージ）がなければなりません。また永遠性がなければなりません」と。

またスリニバス会長は、壮大なる詩集『五大』の「空」のなかで、宇宙の万物を生み出す永遠性を「真如」ととらえられ、このように高らかに歌い上げておられます。

「孤^{ひと}り？ いな…汝は孤りではない…」

銀河の彼方から声がする

宇宙塵の雲の向こう

幾光年のはるか

幾百万の太陽を越えて――

… …

我、真如の国より来れり――

休みなく続く、ピラミッドのごとき創造また創造の領域より――

… …

この不死鳥の真如から

にわかに新しき楽園が花開くだろう」

会長が歌われた「真如の国」とは、「外なる大宇宙」と人間の「内なる小宇宙」を貫く宇宙根源の法則すなわち「空」であります。この「空」と人間の心が共鳴するとき、詩心が生まれます。

詩人は、あるときは、大宇宙の根源の法則を見つめ、またあるときは、人間の生命の中に、無限の可能性を見出します。ゆえに詩人とは、自身と大宇宙を貫く宇宙根源の法（「真如」）を呼吸し、その法に則って、生きとし生けるものを融合させ、人間と人間の心をつなぎ、この人類社会に調和と平和の「楽園」を作り出す人といってもよいでありましょう。

私の恩師である創価学会の戸田城聖第二代会長は、宇宙と森羅万象の關係について考察し、次のように述べております。

「この宇宙は、みな仏の実体であつて、宇宙の万象ことごとく慈悲の行業である。されば、慈悲は宇宙の本然のすがたというべきである」と。

ここでいう「仏の実体」とは、宇宙に本来具わつてゐる慈悲の生命をさすのであります。したがつて戸田会長は、宇宙の森羅万象を「宇宙根源の法」としての慈悲が顕在化したものととらえたのであります。

私どもが信奉する日蓮大聖人は、その著作である「生死一大事血脈抄」において、宇宙の万物を構成する地・水・火・風・空（＝天）の五大の働きを記し、「空」の場が「宇宙根源の法」であり、その働きが四大であるとされています。

分断された世界の中で、貪欲につき動かされる余り、生態系が破壊され、「地球温暖化」や「大量破壊兵器」に代表される人類の「種」としての絶滅さえ危惧されている今日こそ、「宇宙根源の法」に横溢する慈悲の工

ネルギーをくみ出し、四大の絶妙なる営みを洞察する智慧の光によつて、「人間」と「社会」と「宇宙」を結ぶ詩人の「平和と共生の叫び」が不可欠であります。

地球上に生きる民衆の生命内奥には、「詩心」が脈打つており、人間は皆、本来、詩人であります。すべての民衆の生命に脈打つ「詩心」は、「永遠なるもの」「根源なるもの」と共鳴しつつ、「慈悲」「非暴力」「同苦」「寛容」「智慧」等の輝く精神性となつて発現してまいります。

それゆえに、こうした「詩心」を抱く詩人にとって、諦めや無関心は魂の敗北であります。人間の尊厳性を踏みじり、民衆の生命を抑圧するような「悪」は、断じて許すことはできません。なぜなら詩人は、それを自己自身への冒瀆として同苦するからであります。

詩人が、宇宙の深淵を見据え、人間の内奥深く眼を注ぎ、そこから言葉をつむぎ出していくのは、権力に虐げられ、宿命に泣く民衆の声なき声をくみ上げ、民衆の代弁者として叫びをあげるためであります。

人間主義の旗を高く掲げる詩人は、常に民衆を愛し、

民衆と共に生きるがゆえに、民衆を貶める邪悪な権力とは断じて戦うのであります。そして民衆の胸に勇氣と希望の灯火を赤々と点し、民衆の心の太陽を呼び覚ましていくのであります。

ゆえに詩人とは、民衆と共に、悪と戦う「慈悲の人」であり、同時に未来を指し示す光を掲げゆく「英知の人」なのであります。

このような詩人の中からこそ、「世界平和と調和と人間主義の詩」が、無限に生み出されゆくであろうことを、私は強く深く確信しております。

本日、このシンポジウムに集われた諸先生方のますますのご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げ、私のメッセージとさせていただきます。

(いけだ だいさく／創価学会インタナショナル会長)